

岐阜県図書館世界分布図センターでは、収蔵している地図・分布図などの資料展示を随時行っています。地図は一般に古くなれば新しい地図に差し替えられ、用済みとなってしまいます。しかし、古地図には作成された時代の情報が凝縮されており、古地図を読み込むことによってその時代の歴史や人々の地理観などを読み取ることができます。また、新旧の地図を比較することにより、人々の地理的視野の広がりや土地の変遷、測量技術の進歩などを理解することができます。

今回の展示では、「古地図の世界 - 北方図 -」をテーマに、江戸時代に蝦夷と呼ばれた北海道とその周辺地域が、どのように描かれ現在に至っているかを紹介

します。

展示する地図は、古地図としては、江戸時代半ば以降列強の進出により蝦夷地が強く意識され、同地を日本人が描くようになった地図と、江戸時代日本人やヨーロッパ人が描いた日本図です。近現代の地図としては、明治以降陸地測量部や参謀本部などが作成した地図（外邦図や海図）と、現在国土地理院が発行している地勢図です。

古地図と古地図の比較、あるいは古地図と近現代の地図との比較などを通して、北方図の変遷、表現方法や範囲の変化、地図に描かれた情報の違いなどをお楽しみください。

江戸時代の北方図

蝦夷は古くは蝦夷ヶ島と呼ばれアイヌ・シモリ（アイヌの島）でした。江戸時代に入り、蝦夷の松前付近のみが松前藩として幕藩体制に組み込まれましたが、蝦夷全体を日本の領土とする認識は低かったようで、初期の日本図（日本全体を描いた地図）には蝦夷全体は描かれていませんでした。しかし、江戸時代も半ばになると外国船が蝦夷近海に出現するようになり、幕府は蝦夷の探検と直轄領化を進めることとなります。

工藤平助は天明3(1783)年に『赤蝦夷風説考』を著し、この意見を用いた老中田沼意次は蝦夷に探検隊を派遣して大規模な調査が行われましたが、田沼の失脚により中断されました。寛政から文化年間(1789~1817年)にかけてさらに列強が進出してくるようになると、幕

府は国防の必要上、寛政11(1799)年に東蝦夷地を直轄領とし、その翌年には伊能忠敬に命じて蝦夷地の測量を開始させました。同時期に間宮林蔵が西蝦夷地~樺太を探検し、間宮海峡を発見して樺太が島であることを確認しています。また、近藤重蔵は千島を探検し択捉島に「大日本憲登呂府」の標柱を建てています。ロシア使節レザノフ来航後の文化4(1807)年に幕府は蝦夷地全体を直轄領としています。(文政4(1821)年、松前藩に還付)

江戸時代半ば以降、北方地域に注目が集まり、測量とともに地図が作製されました。それらの古地図を展示しますので、北方地域の形の変化や記載内容などをお楽しみください。



蝦夷細見之絵図 高橋政美(書)
文化5(1808)年 82×83cm 手書手彩色

高橋政美が手書きしたこの図は、蝦夷についての最初の刊行図である天明6(1786)年の林子平の「蝦夷国全図」に比較して、蝦夷らしい形となっています。この図の蝦夷の形は長久保赤水が寛政年間(1789~1801)に刊行した「蝦夷松前図」に近く、樺太の形は寛政2(1790)年の松前藩士高橋清左衛門の調査結果があるので、それらを参考にして描いたと思われます。この地図の描かれた文化5(1809)年は、その前年に幕府が蝦夷地を直轄とした年です。



官板実測日本地図 伊能忠敬(原図) 大学南校(版)
明治3(1870)年 159×197cm 木版手彩色

伊能忠敬は幕府の命を受けて、寛政11(1800)年、蝦夷地の測量を開始し、その後この測量と地図作製作業は全国に及びました。幕府は伊能図を秘図としていましたが、慶応3(1867)年に「官板実測日本地図」(伊能小図)として発行しています。本図は、それをもとに明治3(1870)年、大学南校が再刊したもので、4枚組(樺太1、北海道1、本州以南2)のうちの北海道を描いたものです。